

令和 6 年 6 月 9 日現在

機関番号：32643

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00684

研究課題名（和文）非同意が選好的反応となる評価の相互行為研究：「褒め」と「自己卑下」を中心に

研究課題名（英文）An interactional analysis of evaluations in which disagreement is a preferable response

研究代表者

初鹿野 阿れ (Hajikano, Are)

帝京大学・外国語学部・教授

研究者番号：80406363

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は「否定的自己評価」発話、及び「からかい」が現れる連鎖環境とその機能を明らかにすることを旨とした。「否定的自己評価」発話の分析の結果、当該発話は相互行為における何らかの気まずさや予想されるコミュニケーション上のトラブルへのヘッジのような役割をしていると考えられることがわかった。

また、雑談における物語および誘いの展開に生じたトラブルへの対処に見えるからかいを分析した結果、面白い話としてオチまで語る、あるいは、誘いを誘いとして理解できるように組み立てることに失敗して進行にトラブルが生じているやり取りにおいて、からかいがトラブルに対処する妥当な振舞いとして理解可能な連鎖環境で産出されていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、会話参加者が「褒め」「自己卑下」「からかい」を雑談において、どこで、何を対象に、どのように行うことが可能なのか、また、これらの行為の受け手は、どのように振る舞うことが可能なのかを分析した。その結果、これまで分析的に示されてこなかった機能やバリエーションが明らかになった。これらの行為は、コミュニケーション上で重要であるにもかかわらず、日本語教育の場では画一的にしか取り上げられてこなかった。分析の成果は今後、教材開発や活動デザインなど、日本語の会話教育の現場への応用を可能にすると思われる。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to clarify the sequence in which “negative self-evaluation” utterances and “teasing” appear and their functions. The results of the analysis of “negative self-evaluation” utterances revealed that these utterances were thought to serve as a hedge against some kind of awkwardness or anticipated communicative trouble in the interaction. The analysis of teasing that appears in a way of coping with troubles that arise in the development of the story and the invitation in conversation revealed that teasing can be understood as a reasonable behavior to cope with troubles in exchanges in which the story is told to the end as an interesting story, or in which the invitation fails to be constructed in a way that can be understood as an invitation, causing troubles in the progress of the conversation. It was produced in a sequence that could be understood as a reasonable behavior.

研究分野：相互行為分析

キーワード：否定的自己評価発話 からかい 会話分析

### 1. 研究開始当初の背景

本研究の目的は、相互行為において、通常、次の順番で「同意」が適切になる「評価」行為において、次の順番で「非同意」が適切となる「褒め」や「自己卑下」の連鎖の構造を明らかにすることである。研究代表者は平成 23～25 年度までの挑戦的萌芽研究で「修復」の連鎖構造を、さらに、分担者と共に平成 26～28 年度までの挑戦的萌芽研究で「からかい」行為とその連鎖構造を分析した。その過程で「修復」や「褒め」が「からかい」として、また「からかい」の反応として「自己卑下」が現れることを観察した。そこで、本研究では、「からかい」と関連し、かつ「からかい」と同様に展開が難しい行為である「褒め」と「自己卑下」に注目した。

一見無秩序に見えることばのやり取りにも社会的規範があり構造がある。例えば、発話の連鎖には、あるタイプの発話が起ると、その次の順番に、ある特定のタイプの発話が起ることが強く期待される発話のペア(隣接ペア)が存在する(Schegloff & Sacks, 1973)。「あいさつ」に対して「あいさつ」、「質問」に対して「答え」等が典型である。そして、このペアには、「誘い」に対する「受諾」と「断り」のように、次の順番にくる複数の反応の現れ方が同等ではない構造(選好構造)をもつものがある(Pomerantz, 1984, Schegloff, 2007)。「誘い」に対しては「受諾」が選好とされ、「受諾」応答は遅延なく、直接的な表現で現れるのに対して、非選好となる「断り」には沈黙、音の引き伸ばし等による出現の遅延や婉曲的な表現等が観察される。

しかし、中には選好/非選好が通常の見え方と異なるペアもある。「褒め」は「評価」の一種であり、「評価」は次の順番で「同意」がくることが選好とされる。例えば、絵を見て一人が「面白い」と言った場合、聞き手は「そうだね」のような「同意」をすることが強く期待される(選好となる)。しかし、Pomerantz(1978)は、(相手の能力や容姿への)「褒め」の場合、「同意」を行うと、それは「自己賞賛」となってしまう危険性があることを指摘している。そのため、「褒め」のあとには、遅延や言いよどみのない「非同意」や、同意を行う際であっても、その自己賞賛を最小化するため、「褒め」の格下げや、「褒め」の対象の移動等が起こると指摘している(つまり、「同意であるにもかかわらず、選好連鎖としての特徴が現れず、むしろ非選好連鎖としての特徴を持つ。)

「自己卑下」は否定的な「評価」が発話者自身に向けられたものである。「自己卑下」もまた「褒め」と同様、聞き手が同意することが相手に対する批判となるため、非選好となる(Pomerantz, 1984)ことから、聞き手による同意の回避や、出現の遅延、また直接的な非同意等が予想される。しかし、「褒め」や「自己卑下」であっても、連鎖環境や、行為の対象によっては「同意」が出現の遅延や音の引き伸ばし等がなく現れることもある。例えば、「褒め」の対象が相手の所有物である場合、受け手からの「同意」は起こりやすい。また、「褒め」は「からかい」としても現れる。「からかい」は対象を揶揄する挑発的要素とそれが真面目なものではないという遊戯的要素を含む行為である(Keltner 他, 2001)。そのため、「褒め」が相手の能力や容姿を対象としていても、「からかい」として発せられた場合、その遊戯的要素に対する反応として同意や同調、つまり笑いが遅延なく現れることがある。

「自己卑下」も聞き手が反応を「からかい」としてデザインした場合、「からかい」であることを笑いや表情で示しつつも、同意や同調が遅延なく起こりうる。

このような連鎖的特徴を持つ行為は、それが起こる連鎖環境や、受け手の応答に多くのバリエーションがみられる(初鹿野・岩田, 2016)が、まだ十分に分析されているとはいえない。また、「褒め」「自己卑下」と「からかい」は同時に、または連続して起こることが観察されており、その関連性を含めて考察した研究はほとんどなく、分析には意義があると考えられる。

### 2. 研究の目的

「評価」という行為に対する反応は、通常「同意」が適切になるが、「褒め」や「自己卑下」は「非同意」が適切となる。そして、文化によっては、期待される反応が異なる場合があることから、特に接触場面におけるやり取りでは、日本語の母語話者、非母語話者双方にとって展開が難しい行為である。そこで、本研究では、接触場面、母語場面の会話に現れる「褒め」「自己卑下」に注目し、会話分析の手法によるこれらの行為の生起環境や連鎖構造についての分析を通して、そのメカニズムを明らかにすることを目的とする。これらの行為は、コミュニケーション上重要であるにもかかわらず、日本語教育の場では画一的にしか取り上げられてこなかったことを踏まえ、分析の成果を教材開発や活動デザインなど、日本語の会話教育の現場へ応用する道を探る。

### 3. 研究の方法

親しい者同士で行う雑談、及び日本語授業における会話活動をビデオ・ICレコーダーで録画・録音し、それを詳細に文字化する。そのデータ中に現れた「褒め」「自己卑下」「からかい」として観察可能な現象を抽出し、会話分析の手法を用いて分析する。「褒め」「自己卑下」が「同意」で反応される連鎖環境を分析し、それらの連鎖的特徴、及び機能を明らかにする。また、同様に「からかい」が「からかい」としてどのように達成されているか、相互行為上何をしているかを

分析する。

#### 4. 研究成果

本研究は「否定的自己評価」発話、及び「からかい」が現れる連鎖環境とその機能を明らかにすることを旨とした。「否定的自己評価」発話の働きには、1) 自分の発話が他者への挑戦となりうる発話への対処として働いているもの、2) 相手から期待される行為を自分が遂行できないのではないかという懐疑に対処しているもの、3) 自分の未来の行為の予想(肯定的なもの)が聞き手によって十分に支持されなかったやり取りのあとの位置において、自ら否定的な結果予想を行うものがあることが明らかになった。2)と3)は、相互行為における何らかの気まずさや予想されるコミュニケーション上のトラブルへのヘッジのような役割をしていると考えられる。また、否定的自己評価発話は自分の状況や能力について否定的に評価することで笑いを誘い、状況を和ませる働きがあることがわかった。

「からかい」の分析は、雑談における物語および誘いの展開に生じたトラブルへの対処に見えるからかいに注目し、「からかい」が産出される連鎖環境の特徴と相互行為上の働きを会話分析の手法を用いて探った。その結果、面白い話としてオチまで語る、あるいは、誘いを誘いとして理解できるように組み立てることに失敗して進行にトラブルが生じているやり取りにおいて、「からかい」がトラブルに対処する妥当な振舞いとして理解可能な連鎖環境で産出されていた。さらに、「からかい」に続いて、参加者が失敗を検証することでトラブルを解消することが確認された。この分析から、「からかい」が相互行為上のトラブルを顕在化し、その解決を可能にする方策として利用されていることを示唆した。

#### 参考文献：

- 初鹿野阿れ, 岩田夏穂. (2008). 「選ばれていない参加者が発話するとき -もう一人の参加者について言及すること-」. *社会言語科学*, 10(2), 121-134.
- Keltner, D., Capps, L., Kring, A. M., Young, R. C., & Heerey, E. A. (2001). Just teasing: A conceptual analysis and empirical review. *Psychological Bulletin*, 127(2), 229-248.
- Pomerantz, A. (1978). Compliment Responses: Notes on the Co-Operation of Multiple Constrains. In J. Schenkein (Ed.), *Studies in the Organization of Conversational Interaction*. 79-112. Academic Press.
- Pomerantz, A. (1984). Agreeing and Disagreeing with Assessments: Some Features of Preferred/Dispreferred Turn Shapes. In M. Atkinson, & J. Heritage (Eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, 57-101. Cambridge University Press.
- Schegloff, E. A. (2007). *Sequence organization in interaction: A primer in conversation analysis*. Cambridge University Press.
- Schegloff, E. A., & Sacks, H. (1973). Opening Up Closings. *Semiotica*, 8, 289-327.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 岩田夏穂	4. 巻 印刷中
2. 論文標題 雑談におけるトラブルの顕在化と解決の実践－話の展開の失敗に対するからかいに注目して－	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 社会言語科学	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 初鹿野阿れ、岩田夏穂	4. 巻 1
2. 論文標題 雑談における否定的自己評価発話	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 2019年度日本語教育学会秋季大会予稿集	6. 最初と最後の頁 351-354
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 岩田夏穂
2. 発表標題 日本語教育における会話分析の役割 たとえば「からかい」をどう扱うか
3. 学会等名 日本語用論学会第23回（2020年度）大会 シンポジウム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岩田夏穂、初鹿野阿れ
2. 発表標題 やり取りに注目した会話教育の実践と教材－会話分析の応用－
3. 学会等名 日露青年交流センター 日本語教師派遣事業フォローアップ研修（オンライン）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩田夏穂・初鹿野阿れ
2. 発表標題 雑談における（ほめに対する応答ではない）自己卑下発話の機能
3. 学会等名 会話分析研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 初鹿野阿れ・岩田夏穂
2. 発表標題 雑談における否定的自己評価発話
3. 学会等名 2019年度日本語教育学会秋季大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩田夏穂, 初鹿野阿れ
2. 発表標題 会話分析を応用した会話教育の実践と教材作成のためのワークショップ
3. 学会等名 北海道大学高等教育推進機構国際教育研究部研修事業（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩田夏穂
2. 発表標題 「からかい」会話の分類と特徴：何がからかいのターゲットとなるのか
3. 学会等名 日本語教育シンポジウム「インターアクションから捉える能力－会話分析研究と日本語教育」（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 初鹿野阿れ
2. 発表標題 否定的自己評価発話の分析: やり取りの中での働き
3. 学会等名 日本語教育シンポジウム「インターアクションから捉える能力-会話分析研究と日本語教育」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 初鹿野阿れ、岩田夏穂
2. 発表標題 日本語での雑談に現れる自己卑下の分析: 連鎖状の働きに注目して
3. 学会等名 ヴェネツィア2018日本語教育国際大会(国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	岩田 夏穂  (Iwata Natsuho)  (70536656)	武蔵野大学・グローバル学部・教授    (32680)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------